



乳幼児における自己認知の発達 (III) :  
写真像の自己認知に関する研究, および自己認知と  
他の発達領域の関係に関する研究の概観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 純代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00003127">https://doi.org/10.32150/00003127</a>

## 乳幼児における自己認知の発達 (III)

### ——写真像の自己認知に関する研究, および自己認知と 他の発達領域の関係に関する研究の概観——

遠 藤 純 代

#### 1. はじめに

筆者は、乳幼児における視覚的自己認知の発達に関する実証的研究について、報告(I)<sup>(8)</sup>では鏡像の自己認知、報告(II)<sup>(9)</sup>ではビデオ像や映画像の自己認知にそれぞれ焦点を当てて概観し検討してきた。ここでは、写真像による自己認知の発達に関する研究、および、自己認知の発達と他の領域における発達との関係を調べた研究に焦点をあてて概観する。

#### 2. 写真像の自己認知

写真像が鏡像および映画やビデオによる画像と比べ異なる点は、動きがない点である。従って、随伴性 contingency はない像である。静止した像の知覚的特性——像の大きさ、身体各部の含み具合、顔の表情など——は、状況に応じ変化させることができる。

乳幼児の写真像の自己認知に関する実証的研究は、写真という技術が世に誕生してからある程度の年月が経過しているにもかかわらず、また映画やビデオによる画像の自己認知に関する研究と比較しても、さほど多いとはいえない。子ども自身以外の人物の写真と比較刺激として使用する場合、その写真は子ども自身の写真とできるだけ似たものである方がよい。なぜなら、自分および他者の写真に対してなされる分化反応は対人認知の観点からなされている可能性があるからである。たとえば、大人と自分の写真を区別する反応をしたとしても、大人—子どもという年齢の次元に対する分化反応であるかもしれない。このことは、言語命名や指さしによる確認以外の、より初歩的ともいえる分化反応を測度として用いる場合には特にあてはまる。ゆえに、写真像による自己認知に関する研究は、子ども自身の写真および子どもと同年齢の他の子ども(同輩)の写真を使用してなされている。また、身体各部の中でも頭部(顔を中心とした)が最も自己認知しやすい特徴の部分であるため、用いられてきている。

最初の実証的研究は、Zazzo (1948)<sup>(25)</sup>の研究であろうが、この研究に関しては報告(II)にて述べたのでここでは省略する。

植村(1971)<sup>(21)</sup>は、子ども自身および他の子どもの写真を提示して、指さしによる確認と命名による確認がいつごろから可能になるかを横断的方法を用いて調べている。被験児は1歳5か月から2歳2か月までの保育園児12名(男7, 女5)である。刺激は、同室園児19名(生後7か月～2歳

2か月)の写真(白黒で7.7cm×10.1cmの大きさ、7分身で個人服を着衣)を各児につき3種(前向き・横向き・後向き)用意している。はじめに前向きの写真から3枚(3名)ずつランダムに配置し、1枚ずつ「これだれ」と質問する。名前を言えない時には、3枚全てに同様の質問をした後、写真をランダムに並び変えて「○○ちゃん、どれ」と問う。横向き・後向きについても後日、日を改めて実施する。質問は保育者がおこなっている。

以上の実験場面の他、日常場面および統制場面での自分と友人の名前呼びへの応答ならびに名前の自発的使用、出席をとる場面での自己名を呼ばれた時の反応、個人所有の持物に対する行動に関する各観察を、生後1か月から2歳2か月までの年齢の子どもを対象としておこなっている。

実験場面の結果からは、次のことが示された。友人の写真に対する確認は指さしでは1歳7か月頃から本人のいる隣室を指さす反応がみられるが、1歳9、10か月頃から友人の写真を指さすようになる。名前をいうことによる確認は、1歳11か月頃から可能となる。自分の写真に対しては、1歳8か月頃から自分の顔を指さす反応が出現するが、指さしおよび名前によって写真を確認するのは、友人の写真よりはやや遅れて2歳2か月頃からである。一方、実際場面での観察結果は次のとおりである。1歳6か月頃から自分や友人の名前を言い出し、友人を問うと指さして答え始めるが、反応が正確になるのは1歳8か月頃からである。この1歳8か月頃には、出席場面でも自分の名を呼ばれた時にだけ返事をするようになる。またさらに、この時期は、何枚も持っている自分の衣服や、数が少ない友人の持ち物(帽子、靴など)もわかる時期に相当する。

ここで、実験場面においては自己像の確認が友人像よりも遅れる結果が得られているのは、植村自身も述べているように、自分の顔を見る経験は友人の顔をみる経験と比べると少ないので、自分の顔のイメージ形成が困難であったためであろう。

上野(1973)<sup>(23)</sup>は、保育園児について鏡像への反応を観察したが(報告(I)にて紹介)、あわせ、子ども自身の写真と他の子どもの写真を提示し、写真像への反応を調べている。観察対象は1歳3か月から2歳10か月までの幼児17名(1歳前半8名、後半5名、2歳児4名)であるが、実施方法の詳細は不明である。上野の論文に記載された表(23, p.44)から写真像に関する結果をよみとってみると、CA 1歳7か月頃から、友人の写真に対し指さしと名前の両方による確認が出来始めている。自分の写真に対しては、1歳後半児5名中4名が不可または不安定反応を示しているが、サンプル数が少なく試行の回数もはっきりしないので、自分の写真に関する結果はよみとりにくい。

植村と上野の研究は横断法によるが、江口(1976)<sup>(7)</sup>は、保育園1歳児2名を対象として縦断的方法を用いた実験および観察による資料を得ている。写真の課題は隔週に実施し、両児ともCAで1歳5か月から1歳10か月までの資料となっている。また保育室の一部に鏡を設置し、対象児の鏡像や他の子どもを保育者が指さして、「このひとだれ」と質問する、および、「○○ちゃんどこにいる(または、どのひと)」と質問する場面(鏡像・実物場面)と、出欠とりに対する応答(出席場面)の観察を週1回の割合で実施し、VTRに記録している。鏡像を媒介として本人に関する質問をおこなった理由は、自己の身体像を目前にすると自身を対象化しやすいのではないかと考えたことと、自分の顔のイメージ形成をはかることにある。写真課題に用いた写真は、観察対象児2名と他児2名計4名(いずれも同一クラスに所属)の顔写真(カラー・前向き)で、指さし→命名を求めるの順で2回反復実施している。

写真場面に関しては発達年齢で示すと1歳9～10か月頃から指さしによる判定が可能となる。また自分の写真と友人の写真とでは時期のずれはみられないとの結果が得られている。植村の結果と対比してここでずれがみられないのは、鏡場面の設定によって自己の鏡像をみる経験が多く与えられているためであると思われる。なお、命名による応答はDA 1歳9か月頃から自分に関して可能

となり始めるが、友人の名前が大体いえるようになるのは2歳近くであろうと推測している。そして鏡・実物場面では写真場面より若干早いDA 1歳7, 8か月頃に、自分および他児の両方に関して指さしによる確認がなされるのでであろうと推測している。

上記の3研究はいずれも保育園という集団生活を日常的に経験している子どもを対象として、自分の写真および日頃一緒にいる他の子どもたちの写真を、名前によって区別しうる年齢時期を探り出すことに焦点が当てられていた。従って、子どもの反応は、指さしまたは言語命名のレベルで得ることを目的として課題が作られている。これに対し、Lewis & Brooks-Gunn (1979)<sup>(16)</sup>は、指さしや言語的応答以外の反応（注意や発声その他）をも測度として、より広範な社会的対象の写真を提示する一連の研究をおこなっている。彼らの研究は、自己認知の発達を明らかにするとともに、対人認知の発達をも探ることを目的としている。その研究で用いられた課題を大別すると、上の3研究と同様に指さしや言語的応答を求める課題（ラベリング研究）とそれ以外の反応を測度とする課題（写真研究）の2つになる。まず、これまでの記述との関連でラベリング研究からみていくことにする。

ラベリング研究はさらに2つの研究から成る（研究I, II）。研究Iでは10種の写真（子ども自身、子どもの母親、子どもと同年齢の男女児、5歳男女児、10歳男女児、成人男女）の1セットを2回（第1, 2セット）、6種の写真（本人、母親、同年齢同性の子ども、9か月男児、成人男女）のセットを1回（第3セット）、それぞれスライドにて提示している。スライドはカラーで、頭部と肩までの上半身を含み、頭の大きさが6～7インチになるように統一されているが、髪の毛の長さや髪の色、目の色は統一されていない。スライドは、子どもから約1m離れたスクリーンに提示される。継時提示で、提示時間は15秒、提示間隔は5秒である。場面に同席する母親が子どもに対し各刺激を指さしながら、第1, 2セットでは「みて」、第3セットでは「これだれ」と述べる形式にて実施されている。被験児は生後15か月児14名、19か月児11名、22か月児12名合計37名である。なお写真中の人物としては、これまで紹介してきた諸研究がすべて被験児にとって既知の人物を用いてきたのとは対照的に、見知らぬ人物を多く使用している。本人と母親以外は見知らぬ人である。これは、この研究の目的の1つが、子どもの対人認知の枠組を明らかにすることにあるからである。従って、結果を分析する観点の1つに、子どもが性または年齢のカテゴリーによって刺激人物を区別しうるかどうかという観点が採用されている。

主な結果は次のとおりである。少なくとも1枚に対し何らかのラベリングをしたものの割合は、15か月：29%、19か月：91%、22か月：100%である。命名内容を分析すると、大人と赤ちゃんの写真への命名が子ども（5歳、10歳）の写真への命名により有意に多い。次いで命名内容の適切さに関しては、まず人物の年齢および性別の観点からみると、ラベリングのほとんどは年齢と性にふさわしいものであったという（Lewisらの分析方法は、年齢については大人対子ども〔赤ちゃんも含む〕という大まかな分類によっている。従って、成人男性ストレンジャーの写真にdaddy、10歳児の写真にbabyとそれぞれ命名しても年齢の点では適切な命名ということになり、また5歳女児の写真にmommyと命名しても性別の点では適切な命名として処理されている）。続いて、自分の写真に対する命名内容をみると、ラベルしたもののうち半数は自分にふさわしい内容のもの（自分の名前や一人称代名詞）である。これを各年齢群全体に占める割合によってみると、15か月：7%、19か月：27%、22か月：67%となる。他方、同輩の写真に対する命名内容としては、自分に関係した命名は少なく、一般的ラベル（boy, girl, baby）の使用が多い（なお、月齢が低いほど命名したものが各年齢群にて占める%の値が小さいので、各年齢群における被験児総数のうちで正しい命名をしたものの百分率の点で表〔16, p. 148～149の表5-1〕から結果をみていくと、同輩の

表1 命名課題で自己名(個有名詞)および一人称代名詞を使用した子どもの人数

月 齢	刺激条件 反応	何らかの 赤ちゃんの 写 真	自 己	同 輩 女 児	同 輩 男 児	6か月児
18M (12)	名 前	0	0	0	0	0
	人称代名詞	0	0	0	0	0
21M (11)	名 前	4	4	1	0	2
	人称代名詞	1	1	0	0	0
24M (12)	名 前	7	7	1	2	0
	人称代名詞	0	0	0	0	0
30M (10)	名 前	7	7	0	1	0
	人称代名詞	2	2	0	0	0
36M (12)	名 前	8	8	0	0	0
	人称代名詞	5	5	0	0	0
計	名 前	26	26	2	3	2
	人称代名詞	8	8	0	0	0

月齢の( )内の数字は被験児数  
(Lewis & Brooks-Gunn, 1979. p. 154 より)

写真への正しい命名の割合は22か月においても過半数とならない。

研究IIは、より広い年齢層(9, 12, 15, 18, 21, 24, 30, 36か月児)を対象とし、言語命名および指さしによる応答を求める条件にておこなわれている。各年齢群約12名計93名が対象である。写真は、命名(言語生産)課題では自分、6か月児、同年同性および異性の子どもの4種で24か月児まではスライド形式にて継時提示し、30か月児と36か月児に対してはスクラップブックに4枚ずつ貼って用いられている。指さし応答を求める(言語理解)課題では自分、父、母、同輩男女児、成人男女、自分より年長の子ども(男女)の9種類から各3~4枚の写真セットを9つ作成し、アルバムに貼付して提示している。

言語生産課題でのラベリングの正しさに関する結果をみると、自分の写真に対しては、研究Iよりやや遅れて21か月で4割台、24か月で6割近くとなり、30か月では8割となる。同輩については30か月頃から自分の名前を付与する傾向がほとんどなくなり(表1)、30か月以降になると性別に応じた正しい命名(boyとgirl)が、過半数の者において可能となる。また自分の写真も含めた4種の子どもの写真に対しては、性別の点では適切だが年齢の点で不適切なラベル(たとえばmommy, manなど成人を表わすレベル)はほとんど使用されていない。一方、言語理解課題では、18か月をこえると課題に従って指さして応答することがある程度可能となり始める。指さし応答ができたものの中で、自分の写真に対して正しく指させる者が過半数を越えるのは、21か月である。

以上、Lewisらの2つの研究結果をまとめると次のようになるだろう。指さしによる自分の写真の認知は1歳9か月頃から、命名による認知は2歳前後から過半数のものに可能となる。

次に、命名・指さし以外の反応を測度とした研究(写真研究)をみてみよう。ここでも研究は2つの部分から成る。まず写真研究Iをみると、被験児は10~12か月児と16~18か月児計53名である。刺激は、ラベリング研究Iで使用された第1、第2セットの刺激と同じで、10種の人物のスライドである。手続もラベリング研究Iと同様で、刺激は2セット、すなわち2回提示されている。測定された行動は、視覚的fixation、ポジティブな感情(顔表情、発声、運動)、言語ラベル以外の自発的発声である。

結果を概略する。

①写真の人物によって子どもは異なって反応する。ポジティブな感情は、自分の写真と同輩の写真に対する方が、大人の写真と子ども(5歳と10歳)の写真に対するよりも有意に多く向けられる。この傾向は、年少児よりも年長児の方に顕著にみられる。大人-子ども間には差がみられない。注視は、同輩よりも大人に対する方が有意に多く、この傾向は年長児および女兒に顕著である。また、子どもより大人に対する方が有意に多い。同輩-子ども間には有意差はない。

②自己と同輩との分化に関しては、異性同輩と自己との間にのみ分化がみられている(ただし、注視時間についてで、また年少と年長をこみにした場合)。すなわち、自分-同輩間、自分-同性同輩間の分化はなされていない。

つづいて、研究Iの後で実施された予備研究においては自己-同輩間の分化がみられたことから、この自己-同輩間の分化の問題について、研究Iより年長の子どもを被験児に加えて、写真研究IIをおこなっている。生後9~12か月児23名、15~18か月児24名、21~24か月児33名の3年齢群計70名を対象とし、研究Iで用いた10歳児男女の2種の写真の代りに、8か月児の写真と子ども自身の父親の写真を含めた10種の写真がスライドによって提示された。測度は、fixation、感情(表情・発声、ネガティブなものも含む)である。

研究Iでの結果①に対応した部分の結果に関しては、研究Iほど明確ではないが、ほぼ似た結果が一部に得られている。自己-同輩間の分化に関しては、9~12か月と21~24か月の両年齢群においては微笑・注視ともに同輩よりも自己に対する方が多い傾向が示されている。15~18か月群ではこれとは逆に自己よりも同輩に対する方が多い(有意差は微笑についてのみ示されているが)。研究Iと同様、自己-同性同輩間の分化はみられず、自己-異性同輩間の分化は15~18か月に感情の測度においてのみ見出し出されている。

写真研究IとIIの結果をLewisらは次のようにまとめている。①被験児は年齢の異なる人物(この場合、大人・子ども・赤ちゃんの3つに区分)の分化、自己-同輩間の分化が可能である。自己-異性同輩間の分化は少し可能である。これらのことは被験児の年齢に影響されるが、9~12か月に自己-他者の何らかの分化が生じているようであり、15~18か月では条件間の分化が最良である。ポジティブな反応は子どもや大人よりも赤ちゃんに対して、大人より子どもに対して、それぞれ多くひきおこされ、年齢の低い対象を好むかのようである。②写真像の自己認知は21~24か月頃になされるが、おそらくそれ以前の時期になされるのかもしれない。明確な自己認知が最初に出現する時期(約15~18か月)では、自分の写真はよろこび反応をあまりひきおこさないことは、鏡像による研究やVTR研究で示された自己意識反応や顔の特徴の自己覚知(self awareness)に関連しているかもしれない(16, p. 135~140)。

以上、写真像を用いたLewis & Brooks-Gunnの4つの実験をみてきたが、どうも彼らにおいては、自己認知の出現時期が従来の諸研究で明らかにされてきた年齢時期よりも早いことを示そうという姿勢が垣間見られるように思う。そのためであろうが、結果とその考察または結論との間に飛躍がある個所が散見されるのは残念なことである。また、既述したように、研究目的の1つは対人知覚の発達を明らかにすることにあるので、年齢や性別による分化があるかどうかに関する検討をも問題としている。本論のテーマは自己認知の発達の問題であるため、この角度から彼らの研究に対し詳細な検討を加えることは避けるが、対人認知および自己認知の発達の検討の点でLewisらの研究のもつ問題点は、写真の刺激人物の知覚的特徴の統制における不十分さである。特に性別の観点からみた時、写真形式にて提示される刺激人物間の性別による差異は、顔内部(目・鼻など)の構成もさることながら、主に髪長さや着衣の色によって荷われると思われる。ところが彼らの研究

では、使用された写真における着衣の色に関する説明はなされていない。また髪の色や長さはコントロールしなかったと述べているが (16, p. 117)。髪の色や長さの側面において具体的にどのように異なった刺激写真が用いられたかは明らかでないし、結果以降の叙述においてもこの角度からの分析がどこにもみられないのは不思議なことである。

Bigelow (1981)<sup>(14)</sup> は、自己認知の発達における自己の運動と自己像の運動の対応の意義について、縦断的方法によって検討したが(この点に関する紹介は前稿におこなった)、その際、写真像の自己認知に関しても合わせ調べた。被験児(男5名・女6名)は生後18か月の時点から少なくとも8か月間、月1回のペースでテストセッションを受けた。テストセッションは、①自分の親の画像、②自分の過去の画像、③同年齢の他児の画像、④自分の現在の画像、以上の4つのビデオ像の提示、⑤自分の鏡像の提示、の順でおこなわれ、最後に⑥写真条件が実施された。写真条件の手続は次のとおりである。①自分の親を含む大人の顔写真9枚、②自分を含む子どもの顔写真9枚の2セットをそれぞれ提示する。①では自分の親の写真を、②では自分の写真を指さすように被験児に求める。この①→②を2回反復する。写真は白黒で、テストセッション開始前にポラロイドカメラで撮影され、アルバムに貼って提示される。写真における刺激人物の髪の長さや衣服の色などについては記述されていない。

結果は、親の写真の認知は生後18~20か月であったのに対して、自分の写真は23~27か月(平均25か月)で認知され、写真像の自己認知よりも親の写真的認知が先行するというものであった。また随伴性のない自己のVTRテープをみる条件での自己認知は23~24か月(平均24か月)になされたが、写真条件での自己認知よりも自己の過去の画像条件での自己認知が先に成立する子どももいれば、逆のパターンを示す子どももいたという。

Norman & Kagan (1980)<sup>(15)</sup> は、2歳代以上の幼児を対象として、自分の顔の各部分が平常の状態で見えている写真の他、顔の一部を欠いた写真、および手の平の部分のみの写真を提示し、自己概念の発達について検討している。自分の写真は6種で、①微笑している顔の写真、②しかめっつらの顔の写真、③目と鼻のみから成る写真、④目の部分を黒くした顔の写真、⑤手の平を上に向けた手の写真、⑥手の平を下に向けた手の写真、である。③、④は①の微笑している顔写真をもとに作成している。白地をバックにして撮影したカラー写真で、プリントの大きさは実物と等しくなるようにしてある。手の写真に写る手は、包帯、色を塗った爪などの手がかりを含まない。顔の写真は、同年齢同性で目と髪の色が被験児と同じである他の子どもの写真3枚とともに、それぞれ提示する。手の写真もやはり似た3枚の写真と一緒に提示する。提示後「○○(子の名前)のはどれ」と問う。被験児は2.5~5.5歳の幼児122名である。

95%以上の子どもが、完全な顔の写真2枚(写真①と②)と目の部分を黒くした顔の写真と同定できるという結果が得られている。残りの3種の写真(④~⑥)については、3枚(=3種)の写真中2枚以上について自分の写真を正しく同定できる者の割合は、年少群(生後30~43か月)では全体の約3分の1であるのに対し、年長群(54~65か月)では2分の1となり、僅かではあるが年齢とともに上昇する傾向がうかがわれている。

以上、乳幼児における写真像の自己認知に関する研究を概観してきた。ここでまとめの意味として諸研究における問題点を指摘しておきたい。それは、写真の人物の知覚的特徴のコントロールの問題である。この問題は、Lewisらの研究のところでも述べたことであるが、他の研究の多くについてもあてはまることである。

被験児にとって既知の人物(たとえば保育園で被験児と同じクラスに所属する他児)を比較刺激の人物として使用する場合は、髪の長さを統一することは現実にはなかなか困難であるにしても、

着衣のコントロールは必要である。我々の日常生活において、着衣は個人特有のものであることが多く、着ている服を手がかりとしてその人物を同定する場合すらあるので、特に留意すべきである。この点で、植村、江口、上野の3研究とも統制がされていない。写真の刺激人物における各種の知覚的示差特徴のコントロールに関しては、乳児の対人認知に関する研究で用いられている方法上の厳密さ、および、そこで得られた結果にもっと学ぶ必要がある。たとえば、Dirks & Gibson(1977)<sup>(6)</sup>の実験によると、写真一般に対する先行経験がなくとも生後5か月児は、実物の人物の顔とその人物の顔写真との間の類似性を知覚できるという結果が示されている。さらに、そこでは、habituation/dishabituation パラダイムをもとにして、髪の色・髪スタイル・性別の要因を変化させて調べている。そして、実際の人物の顔への反応と、その人物と髪の色と髪形が似た同性の新奇な人物の顔写真への反応の間には差がみられないことから、被験児が実物の顔と写真の顔とその間に知覚する類似性は、髪の色・髪スタイルや顔のかなり大まかな特徴によっているらしいということが示されている。また生後3か月児を対象として写真による母親の顔の認知について調べた研究 (Barrera & Maurer, 1981)<sup>(11)</sup>によると、髪の色と顔の明るさをマッチさせる条件下で母親の写真と新奇な人の写真の分化がなされるとのことである。

写真という像形式における自己認知を問題とすることは、静止像に含まれる各種の視覚的な示差特徴——顔の形や顔面内部の造作、髪の色や髪形など——を手がかりとして成立する認知を問題にすることである。従って、①これらの知覚的特徴をより精密に統制すること、②言語表現や指さし以外の行動を指標として初期の発達の変化を調べようとする場合には、より低い年齢時期をも対象として検討することが、今後の課題となるであろう。

### 3. 自己認知の発達と他領域での発達との関係

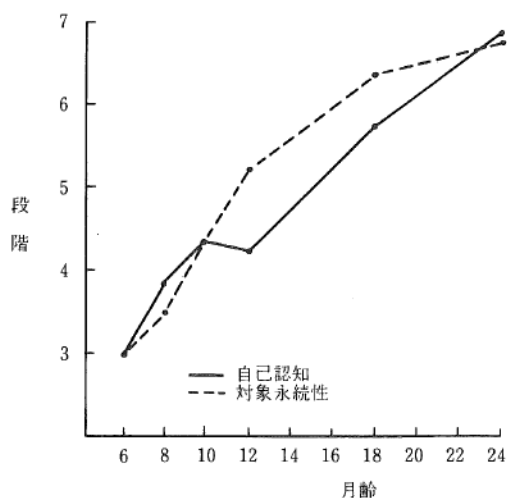
自己認知の発達が他のどのような能力の発達と関連しているかについての検討は、自己認知の発達過程の構造を明らかにすることにつながる点で、意義をもっといえる。しかし現在のところ研究は少なく、認知的発達、情動的発達、および向社会的行動の発達の、それぞれ一部との関係が調べられているにすぎない。

#### (1) 認知的発達との関係

検討されている認知能力の側面は、対象の永続性の概念と注意である。

まず対象の永続性に関しては、Bertenthal & Fischer (1978)<sup>(3)</sup>の研究がある。報告 (I) にて既に紹介したように、自己認知の発達の順序を区別する5課題とともに、対象の永続性課題を6~24か月児におこない、自己認知の発達と対象の永続性の発達の時期的関係について調べている。Pia-

get(1937)<sup>(19)</sup>による感覚運動的知能の6つの発達段階の測定について Fischer が定義し直し、さらに1段階を追加した計7段階に対応して自己認知課題が構成されている。段階に関する Fischer の定



第1図 自己認知と対象の永続性の関係 (Bertenthal & Fischer, 1978, p. 49)



義は、乳児がなし得る協調行為のタイプと複雑さの観点からなされている。(実際には段階3以降の各段階に対応した5つの課題が作成されている。それは、Piagetの考えによると段階1と段階2では自分についての覚知(awareness)が示されないからだという)。

対象の永続性概念の発達も同様にPiagetの理論に依っているので、自己認知と同じ発達順序をたどると予想されるわけである。だが、Bertenthalらは、Piagetの或る段階における複数の課題領域間の関係については、正確な同時性(synchrony)は稀であるという先行諸研究結果にもとづいて、自己認知と対象の永続性とは同じ発達の順序に従った発達を示すとしても、完全に同時期には発達しないし、どちらかが一貫して他方の先行条件となるわけではない、と仮定する。

ところで、自己認知課題の具体的な内容については既に紹介したので、ここでは、対象の永続性課題に関して補足しておきたい。この課題は、Piagetの感覚運動的知能の発達に関してUzgiris & Hunt(1975)<sup>(24)</sup>が開発した一連の発達尺度の中の1つ(スケールI)である。Uzgiris & Hunt(1975)を参照しながら以下に実施方法と項目の内容を述べる。課題は、子どもを机と向い合わせ両手が操作可能な状態にして坐らせて実施する。隠す物としては、プラスチックの人形や動物のような子どもが興味を示す音の出ない玩具を使う。スクリーンとしては、色がそれぞれ異なる不透明な布3枚を使う。A, B, Cは隠す場所である。目に見える置き換えとは、物を隠す状況が子どもにとって観察可能な場合で、目に見えない置き換えとは、まず物を入れ物に隠してからその入れ物をスクリーンの下か後に隠し、入れ物を隠した状態で物を入れ物から出して、空にした入れ物を見せる場合のことである。入れ物は項目⑩～⑬までは箱、⑭～⑮は手の平を使う。

Bertenthal & Fischerが実際に使用したのは項目③～⑮までである。それら項目の内容は次の通りである。項目③Aにて物の一部を隠す。④Aにて物を完全に隠す。⑤④において布が物を隠している間に第2の布を横に置く。④終了直後、第2布の下に物を完全に隠す。各布による隠しは続けて2回以上おこなう。⑥A→B→A→…と交互に完全に物を隠す。⑦A, B, Cのいずれかに物を完全に隠す。隠す順はランダムにおこなう。⑧A→B→Cへと連続的な目に見える置き換えをする。⑨Aにて物を完全に1枚の布に隠す。続いて第2布をAの第1布の上に重ねる。同様に第3布も重ねる。⑩1枚の布にて1回の目に見えない置き換えをする。⑪2枚の布にて1回の目に見えない置き換えをする(⑩の最後の提示中に第2布を横に置いておき、⑩終了直後、物を第2布にて目に見えない置き換えをする)。布への隠しは続けて2回おこなう。⑫A, Bにて交互に、1回の目に見えない置き換えをする。⑬A, B, Cのいずれかにて1回の目に見えない置き換えをする。⑭A→B→Cの方向で一連の目に見えない置き換えをする(手の平に物を隠すのを見せてからA→B→Cと手を移動させていき、第3布の下に物を置いてから空になった手をみせる)。⑮隠す場所を⑭と逆にして、一連の目に見えない置き換えをする(⑭にて第3布の下に物が隠れているという期待が出来てから後におこなう。A→B→Cの順で手を移動させるが、その際Aに物を隠してそのまま手だけを握って移動させ、Cに来てから初めて空の手をみせる)。以上の各項目を複数回反復する。

結果は、図1に示す通りである。既に紹介したように生後12か月と18か月の2時点で自己認知と対象の永続性との間に有意差が見い出されていることから、両者の関係に関する前述の仮説は支持されたとBertenthalらはみなしている。

対象の永続性と自己認知との関係については、Lewis & Brooks-Gunn(1979)も調べている。彼らは、この他に、注意と自己認知との関係についても同じ実験の中で調べている。

対象の永続性の課題は、Bell(1970)が物の永続性、人の永続性および母親への愛着の三者間の関係をみる目的で開発した物の永続性尺度によっている。この尺度は、先のUzgiris & Huntによる対象の永続性尺度とは独立して開発されているが、両方ともPiagetの観察と理論に依拠しているた

め、互いに似ている。次に、Bell (1970)<sup>(2)</sup>を参照して説明をおこなう。スクリーンとしては6インチ×8インチのフェルト布(赤、白、緑)を用いている。テストは11項目から構成されており、各場面において出現する行動(全部で15行動)のそれぞれがPiagetの段階説にならって得点化されている。すなわち、段階3bから段階6cまでの15個のサブステージが測定されることになる。続いて項目内容を略記する:①A(以下、A、B、Cは隠す場所をさす)にて物の一部を隠す。②被験児が物に手を伸している時に、Aにて物を完全に隠す。③Aにて物を完全に隠す。④Aにて被験児が物を見つけたあとすぐに、Bにて物を隠す。⑤物をAからBに連続して置き換える。⑥A→B→Cへと連続して物を置き換える。⑦ランダムな交代(ACB、BAC、CAB)にて物を置き換える。⑧Aにて1回、目に見えない置き換えをする。同様にBにてもおこなう。⑨AからBへと連続的に目に見えない置き換えをする。⑩A→B→Cへと目に見えない置き換えをする。⑪目に見えない置き換えのランダムな交代(ACB、BAC、CAB)。各項目における「適切な反応」から抽出されてくる段階をそれぞれ記すと、項目①:3b、②:3b→4、③:4、④:4→5a、⑤:5a、⑥:5a→5b、⑦:5b、⑧:6a、⑨:6a→6b、⑩:6b→6c、⑪:6c、となる。なお、このBellの尺度とUzgirisらの尺度を対照させてみると、Bellの項目①、②、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩は、それぞれ、Uzgirisらの項目③、④、⑤、⑥、⑧、⑦、⑩、⑭と等しいことがわかる。

注意課題では、スクリーンに同一刺激を続けて6試行提示した後、7試行目に新奇刺激を提示して、冗長刺激に対する反応の慣れと新奇刺激に対する反応回復のそれぞれの程度を測定する。刺激は、6試行までは20本の直線が描かれたカラースライド、7試行目には20本の曲線が描かれたカラースライドである。提示時間は30秒、試行間隔は15秒である。

自己認知に関する資料は、鏡課題とVTR課題によっている。鏡課題は、Lewis & Brooks-Gunnの鏡研究Iと同じ鏡装置を用いて、母親が子どもの鼻に口紅をつけた後、子どもを鏡の前に約90秒(±10秒)おき、子どもが少なくとも3回鏡をみるよう励ますという形で実施されている。VTR課題は、LewisらのVTR研究第1実験と同課題である。すなわち、①随伴的(以下Cとも略記する)自己条件、②非随伴的(以下NCとも略記する)自己条件、③NC他者条件の3条件をランダムな順に実施する。(鏡研究Iについては遠藤(1982)、VTR研究第1実験については遠藤(1983)を参照されたい)。

4課題を2回に分けて実施する。1回目に注意課題と鏡課題、2回目にVTR課題と対象の永続性課題をおこなう。被験児は生後9~12か月、15~18か月、21~24か月の3年齢群計93名である。

なお、この研究では親の社会経済的地位、教育水準、家族構成、日常生活における鏡との接触経験について質問紙調査を通して資料を得、これらの家族変数や鏡との先行経験と自己認知との関係をも検討しているが、ここでは自己認知と認知との関係を中心に結果をみていく。ところで、対象の永続性課題では、段階3b、4、5a、5b、6a、6b、6cにそれぞれ1~7点を与えて個人得点を算出している。その結果、9~12か月群は段階5a、15~18か月群は段階6a、21~24か月群は段階6bにはほぼ相当するという結果となっている。

鏡課題にて示されたマーク向け行動と対象の永続性課題の得点との間、および、マーク向け行動と注意課題での反応回復との間にはそれぞれ有意に相関が認められた。VTR課題ではNC自己条件とC自己条件の両条件において、随伴性遊びと対象永続性との間、随伴性遊びと反応回復との間の相関がそれぞれ有意であった。NC自己条件での模倣(テープに現われる行為の模倣)は、対象の永続性、反応回復、反応の慣れのいずれとも有意な相関を示した。また、鏡課題とVTR課題でのメジャーを結合した自己認知の結合メジャー(3種あり、Iはマーク向け行動+C自己条件での随伴性遊び、IIはマーク向け行動+NC自己条件での随伴性遊び、IIIはマーク向け行動+NC自己条件で

の模倣，である。いずれも，両行動あり：3点，どちらかの行動あり：2点，共になし：1点を振り分けた結果から算出している）と認知メジャー間にも有意な相関関係が認められている。つまり，対象の永続性との間，および反応回復との間は，いずれの結合メジャーにおいても有意な相関であった。反応の慣れとの間は，結合メジャーIのみにて有意であった。

ところで，自己認知と認知の両課題は，年齢に関連しているため，一連の段階様の多重回帰法を施して年齢効果の分離をはかったところ，対象の永続性と自己認知との有意な関係は，年齢コントロール後には消失してしまった。これに対し，反応回復と自己認知との関係は，年齢コントロール後においてもなお有意であったという。

また，年齢群別にみると，NC自己条件での模倣はどの年齢群でも認知の測度と関係していた。9～12か月，15～18か月では対象永続性との，21～24か月では反応回復に関係していた。

Bertenthalら，およびLewisらは，いずれも，自己認知を長期にわたる発達過程とみなしている。その過程に含まれる発達の達成の内容も当然多岐にわたるはずである。従って，このプロセス全体における認知能力（ここで問題とされている対象永続性と注意についても，また他の認知能力についても）との関係は，一様でないはずである。予想される関係のメカニズムに関連したこととしては，Bertenthalらは物をさがす能力，Lewisらは刺激における変化に気づく能力，距離と対象の概念などを挙げているが，メカニズムに関する思索をより一層めぐらし，予想を明確化した上で実証的検討をおこなう必要があると思われる。また，対象永続性については，これらの研究で調べられている対象は物，すなわち非社会的対象であるが，人という社会的対象の永続性との関連を検討することも自己認知の発達過程の解明にとって有益であろう。

## (2) 情動的発達との関係

この点に関する研究は今のところ1つしかない。Lewis & Brooks-Gunnの研究<sup>(16)</sup>で，彼らはまず，情動的経験（emotional experience）と情動の表出（expression of emotion）とを区別する。情動的経験は身体変化の意識的感情と認知的評価を必要とし，情動の表出はこれらを必要としないという。身体変化は位置（すなわち自己）を持つし，この変化は自己によって経験され評価されねばならない。このことからLewisらは，情動的経験は自己知識の発達に依存していると仮定する。だが，言語能力と内観なくしては情動的経験を査定するのは困難なので，情動的経験を示すものとしては情動をひきおこす場面での情動的表出（ここでは恐れ）を用い，自己知識を示すものとしては鏡場面での自己認知を用いている。仮説は，自己認知をしない子どもは自己認知をする子どもよりも，適切な情動的表出がより少ないであろうということである。

被験児は，生後9～12か月児11名，15～18か月児11名，21～24か月児8名，合計30名である。課題としては，自己認知課題として鏡課題，情動をひきおこす課題としてストレンジャー・アプローチ課題を用いている。鏡課題で子どもは，①マークなしの状態を鏡をみる，②鼻にマーク（口紅）をつけられた後に鏡をみる，の2試行を受けた。各試行約90秒である。ストレンジャー・アプローチ課題の手続は次の通りである。子どもは室内にて母親の椅子と並んで，高椅子にすわっている。ドアからストレンジャー（女性）が入室し，ドアより1.5m離れた位置1に1秒とどまり，続いて位置2（位置1から1.5mの距離にある）へ行き，止まる。このようにしてストレンジャーは，位置4（子どものすぐ前）まで進み，子どもの手に触れてから戸口へ歩み去る。このエピソード全体の所要時間は約25秒である。

測度としては，鏡課題ではマーク向け行動（鼻にふれたり，鼻を指さしたり，「鼻」とか「赤」とか言う），体に向けた行動（鼻以外の顔の部分や胴体に触れる），模倣（おどけてふるまう，内気にふるまう，作り顔をする）の3つが使用されている。ストレンジャー・アプローチ課題では，ポジ

ティブな顔、ネガティブな顔、注意した顔の3つの顔表情カテゴリーが用いられている。

主な結果を述べる。鏡課題での結果は、Lewisらの鏡研究と本質的には同じであったという。ストレンジャー・アプローチ課題では、全体の6割以上は注意している表情であり、次いでネガティブな顔が4分の1以上で、ポジティブな顔は僅かであった。表情の出現率には年齢差があり、15～18か月ではネガティブな表情が半数近くで他年齢と比べて多く、21～24か月では注意している表情が多い。表情の測度と自己認知の測度との関係については、体に向けた行動は3年齢群すべてにおいて出現したが、この体に向けた行動は、全年齢をこみにした場合、および15～24か月までの年齢の、いずれの場合においても、ネガティブな表情と有意な関係が認められている。だが、自己認知の明確な指標であるマーク向け行動と表情との間には、統計的に有意な関係は見い出されていない(15～24か月にて、マーク向け行動を示さなかった8名中、注意の表情：7名、ネガティブ表情：1名で、注意した顔の占める割合が有意に大きい ( $p < .05$ ) が、マーク向け行動を示した11名中では、注意した表情：6名、ネガティブ表情：5名で差がない)。

上述の結果をLewisらは、仮説を支持する方向にあると述べているが(16, p. 196)、それは少し言い過ぎではないかと思われる。確かに、見知らぬ人への恐れは、自己領域、自己認知の発達と関連していると思われる。例えば、園原(1980)<sup>(20)</sup>は、乳児期後半頃から子どもの心的行動場面の原型に分化が生じてくるが、このような場面の原型として、①積極的社会心理的場、②消極的社会心理的場、③葛藤的社会心理的場の3種を考えている。人見知りは②の分化を意味するし、母親が遠くにおり未知の人が近くにいる状況は③であるという。葛藤状況をいかに克服するかに自己という停泊点(anchor)の成立する源があると述べている(20, p. 315～316)。自己認知と見知らぬ人への恐れとの発達の関連は、ひきつづき検討を要する問題である。

### (3) 向社会的行動の発達との関係

最後に、向社会的行動との関係をみた研究にふれよう。Johnson(1982)<sup>(15)</sup>は、苦しんでいる人に対する共感的な反応の発達過程に関するHoffman(1976, 1978)<sup>(11)(13)</sup>の理論をもとにしてこの関係について資料を得ている。

被験児は生後18～24か月までの幼児24名で、苦痛状況にある他者に対する愛他行動の出現をみる場面と自己認知課題の両場面をおこなうラボラトリー・セッションにおける資料と、愛他行動に関する家庭での観察資料の2面から調べられている。

ラボラトリー・セッションの実施手続は次のようなものである。子どもは一方視ミラーのあるラボラトリー(4.3 m×7.3 m)に母親と共に入室し、部屋に慣れるためしばらくそのままのまゝでいる。その後、ボラロイドカメラにて、幼児の上半身が撮影(カラー)される。

(A) 苦痛場面：成人女性のストレンジャー(以下St.と略す)と母親が部屋中央に約3 m離れて座り、その間に幼児を置く。実験者が色の異なる3つのぬいぐるみ人形を持って入室し、「これは〇〇の人形よ」と各自の名前を言いながら3名に人形を手渡し退室する。(a)実験前の相：母親とSt.は各自人形で遊ぶが、被験児に対しては各自の人形を渡さない(1分)。(b)ストレンジャー-苦痛の相：実験者が入室し、St.ともみ合った末にSt.から人形を奪いとる。実験者は退室する途中で被験児が見ている時に、人形を落していく。St.は、手で顔を覆って泣く(1分)。(c)母親-苦痛の相：(d)と同様のことを母親についておこなう(1分)。

(B) 鏡課題：子どもを一方視ミラーと向い合わせてイス上に坐らせる。①子どもは「マークなし」で鏡と向き合う(30秒)、②鏡をカーテンで覆い、母親がティッシュで子どもの鼻に口紅をつける、③子どもは「マークあり」の状態で見ると向き合う(1分)。①、③ともに、母親が鏡を指さして「これ、だれ」と問う。記録は一方視ミラーの背後からVTRにてなされる。

(C) 写真同定課題：ラボラトリー入室直後にとった写真3枚（被験児，同年齢の男女児）を提示し，①自己，②男児，③女児の順に「〇〇はどこ，〇〇を指さして」と母親が子どもに質問する。なお，3課題の実施順は，(B)→(A)→(C)である。

家庭での観察は母親によっておこなわれる。ラボラトリー・セッション前2週間における家庭および近隣での行動が観察記録される。子どもが他者の苦痛を目撃した場面に関して，日付，場所，出来事，子どもの反応などが記録される。

ラボラトリーの苦痛場面で最も多くみられた向社会的行動は，「苦しんでいる人の人形をとってきてその人に返す」行動であった。これは，St.一苦痛場面よりも母親一苦痛場面の方に有意に多くみられた（母親：50%，St.：9%）。家庭で観察された苦痛場面は，きょうだいや他の子どもが苦痛状況にある場合が多かった。こうした場面での被験者の反応としては，他者が苦痛状況にあることを認める行動（注目する，質問する，述べるなど）[55%]と，直接的な向社会的行動（その人の人形を取ってきてやる，自分の人形を与える，慰める）[55%]とが多く，他者の力を借りた間接的な向社会的行動（苦しんでいる人の所へ母親を連れていくなど）と回避・無視は稀であった（前者：3%，後者：2%）。（なお，数字は，全エピソード数に占める割合を表わす）

自己認知課題では，鏡，写真いずれにおいても過半数の者が自己認知できた。鏡課題では70%のものがマーク向け行動を示し，写真同定課題では54%のものが自分の写真を正しく同定できた。

向社会的行動と自己認知との関係については，ラボラトリー・セッションでは鏡場面のマーク向け行動と母親一苦痛場面での向社会的行動の間にのみ有意な連関が得られている。男女別にみると，女兒についてのみ，この連関は有意であった。自己の写真の正しい同定と各苦痛場面での向社会的行動間の連関は，いずれも有意ではなかった。一方，自然的セッティング（家での観察）下で多く生じた直接的な向社会的行動と自己認知との有意な連関は，鏡課題，写真同定課題のどちらについても示されなかった。そして，自然的セッティングでの直接的な向社会的行動とラボラトリーでの直接的な向社会的行動との連関は有意ではなかった。この最後の結果に関し Johnson は，自分の子どもが愛他行動を示さない場合のことを母親は報告したがるまいと述べ，母親による観察の信頼性の低さにその原因を求めている（1955, p. 386～387）。

ところで，先に述べたごとく，Johnsonの研究は Hoffmanの考えを土台としているので，Hoffmanの理論をより詳しく参照しつつ，Johnsonの研究結果について考えてみたい。Hoffmanの理論の中心は，苦しんでいる人への共感的反応（共感的苦痛 empathic distress）は，他者の認知的理解の発達に依存しているということである（Hoffman, 1975）。Hoffmanは，他人への認知的理解と共感的感情が一体となって，共感的苦痛を生み出すと考える。Johnsonの研究で対象とされた年齢範囲に限って，共感的苦痛の発達過程に関する Hoffmanの理論を述べると，次のようになる。段階(1)：子どもは，自分と他人とは身体的に異なった存在であると知覚できない，つまり自他が未分化的な段階においても，共感的苦痛を経験することができる。だが，この段階では，子どもは苦痛を感じているのが誰であるかをはっきりと認識していないし，苦しませる状況が自分に起きたかのようにふるまったりもする。段階(2)：自他を異なる存在として知覚できる段階に入ると（1歳前後），苦しんでいる人が他人であるとわかるようになる。しかし，自分と他人の内的状態を区別できないので，他人の苦痛の原因が何であるかということや，状況内でその人がどんな要求を持っているかということはわからないでいる。そして，子ども自身が最も心地よいと思うものを苦しんでいる人に与えることでその人を助けようとする。この段階は，こういった限界があるけれども，段階(1)におけるような，初歩的で不随意的な反応ともいえる平行的な共感的苦痛から，より相互的な同情的苦痛（sympathetic distress）の第1レベルへと離脱したことを意味する。(3)子どもは他人を，身体

的存在としてだけでなく、固有の感情や考えの源として、すなわち自分とは異なる内的状態をもつ存在として、初歩的ではあるが理解し始める。共感的反応は、苦しんでいる人の感情により適切な反応となっていく。ところで、段階(3)を段階(2)と区別する基礎的過程の1つは役割取得である。段階(3)のような初歩的な役割取得を獲得し始める時期は2歳頃であると Hoffman は述べているが (10, p. 615)、彼自身同じ論文の中で、子どもにとって親しみがあり高く動機づけられた自然的セッティング下では、2歳前の年齢でも初歩的な役割取得がみられるようだと実際の観察例を引用して述べている (10, p. 612)。

以上のような Hoffman の理論をもとにして Johnson の研究を考えると、彼の研究における被験児たちは、段階(2)ないし(3)にいと想定できる。だが、彼の設定した場面で出現した向社会的行動のうちのいずれの行動が、Hoffman のどの段階に対応した行動なのかを一義的に決めるのは難しい。たとえば、「実験者によって奪いとられ捨てられた人形を拾ってきて、奪いとられた人に渡す」行動は、段階(3)に対応する行動であるとまず解釈することはできる。すなわち、その人形は、被験者に対し与えられた人形ではなく、苦しんでいる人にかつて与えられ、実験者によって奪いとられる直前までその人が遊んでいた人形であるが故に、その人の人形であり、その人が泣いていた時に最も欲しがっている物である、とみなすことができる。しかし、これ以外の解釈の可能性も否定できない。一例をあげれば、わずか1分間という実験前の相において、3名の人物のおのおのに「各自の物だ」として手渡され、各自がわずかの間遊んだ人形が、一体どれだけ各人物に「自分の物」としての所属意識をもたらしたか、疑わしい。子どもが「子ども自身の人形を苦しんでいる人に渡す」行動は、必ずしも段階(2)に対応する行動だとのみ推測できるわけではないと思われる。Johnson 自身は、目的の部分においても単に、この年齢での愛他行動の存在を明らかにすることと、愛他行動と自己分化の関係を調べることを目的として挙げているだけで、彼の研究でみられた向社会的行動の具体的内容と Hoffman の段階との対応に関しては明確に述べていないし、またこういった角度からの分析はおこなっていない。もちろん、Johnson も述べているように (15, p. 386)、共感以外の動機が、出現した行動の背後に存在していた可能性もあるわけで、段階との対応は常に推測されるレベルの事柄であって、断定できない性質を有していることはいうまでもない。が、しかし、単に自己認知の水準と共感的苦痛の存在の関係を調べるだけに終わってしまうのでは、研究の視点としてやや粗いといえるのではないだろうか。自己認知と共感的反応の両発達の相互関係を解明する実験を組むことは難しいことのように思われるが、よりきめの細かいデザインと分析方法を工夫する必要があろう。

以上、自己認知の発達と他領域における発達の関係を調べようとする研究についてみてきた。何分にも研究数が少なく、その検討はまだ開始されたばかりといえよう。今しがた述べたように、予想される構造的関係をデータの中で立証することは、元来困難を伴う作業であると思われる。関係のメカニズムに関し理論的に一層詰める作業をすることが、研究計画とデータ処理の上での工夫と合わせて重要と考えられる。

## 文 献

- (1) Barrera, M. E., & Maurer, D. 1981 Recognition of mother's photographed face by three-month-old infant. *Child Development*, 52, 714-716.

- (2) Bell, S. M. 1970 The development of the concept of object as related to infant-mother attachment. *Child Developm.*, 41, 291-311.
- (3) Bertenthal, B. I., & Fischer, K. W. 1978 Development of self-recognition in the infant. *Developmental Psychology*, 14, 44-50.
- (4) Bigelow, A. 1981 The correspondence between self-and image movement as a cue to self-recognition for young children. *J. Genet. Psychol.*, 139, 11-26.
- (5) Bower, T. G. R. 1974 *Development in infancy*. W. H. Freeman & Company. San Francisco, (岡本夏木ほか訳「乳児の世界—認識の発生・その科学」ミネルヴァ書房 1979).
- (6) Dirks, J., & Gibson, E. 1977 Infants' perception of similarity between live people and their photographs. *Child Developm.*, 48, 124-130.
- (7) 江口純代 1976 1歳児における名前による自他の区別の発達. 人文論究(北海道教育大学函館人文学会), 第36号, 15-26.
- (8) 遠藤純代 1982 乳幼児における自己認知の発達(I)——鏡像の自己認知の発達に関する研究の概観——. 人文論究, 第42号, 1-13.
- (9) 遠藤純代 1983 乳幼児における自己認知の発達(II)——映画像やビデオ像の自己認知に関する研究の概観——. 人文論究, 第43号, 27-38.
- (10) Hoffman, M. L. 1975 Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, 11, 607-622.
- (11) Hoffman, M. L. 1976 Empathy, role-taking, guilt, and the development of altruistic motives. In T. Likona (Ed.), *Moral development and behavior*. New York: Holt, Rinehart, & Winston. (文献(5)による)
- (12) Hoffman, M. L. 1977 Empathy, its development and prosocial implications. In C. B. Keasey (Ed.) *Nebraska symposium on motivation* (vol. 25). Lincoln: University of Nebraska Press. 169-217.
- (13) Hoffman, M. L. 1978 Toward a theory of empathic arousal and development. In M. Lewis, & L. Rosenblum (Eds.) *The development of affect*. Plenum Press, New York. (文献(5)による)
- (14) Hoffman, M. L. 1979 Development of moral thought, feeling and behavior. *American Psychologist*, 34 (10). (依田明, 宮前理訳 道徳性の発達——道徳的思考・感情・行動の発達, 依田明監訳「現代児童心理学4 情緒と対人関係の発達」89-117, 金子書房, 1981).
- (15) Johnson, D. B. 1982 Altruistic behavior and the development of the self in infants. *Merrill-Palmer Quarterly*, 28, 379-388.
- (16) Lewis, M., & Brooks-Gunn, J. 1979 *Social cognition and the acquisition of self*. Plenum Press, New York.
- (17) Mussen, P., & Eisenberg-berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping: the development of prosocial behavior in children*. W. H. Freeman & Company, San Francisco. (菊池章夫訳「思いやりの発達心理」金子書房, 1980).
- (18) Noran, E. & Kagan, J. 1980 Recognition of self and self's products in preschool children. *J. Genet. Psychol.*, 137, 285-294.
- (19) Piaget, J. 1937 *La construction du r'eel chez l'enfant*. Delachaux et Niesle, Neuchatel, 1963 (文献(2)による).
- (20) 園原太郎 1980 認知の発達 培風館.
- (21) 植村美民 1971 乳幼児期におけるエゴの発達について(1)——名前とイメージによる自己と他者の区別——. 日本心理学会第35回大会発表論文集, 354-355.
- (22) 植村美民 1979 乳幼児期におけるエゴ(ego)の発達について 心理学評論, vol. 22 (1), 28-44.
- (23) 上野留美子 1973 乳幼児期における自己像把握について 乳幼児保育研究(京都大学幼児保育研究会), 第1号, 27-50.
- (24) Uzgiris, I. Č., & Hunt, J. MoV. 1976 *Assesment in infancy: ordinal scales of psychological development*. University of Illinois Press, Chicago. (白瀧貞昭・黒田健次訳「乳幼児の精神発達と評価」日本文化科学社, 1983)
- (25) Zazzo, R. 1948 Images du corps et conscience de soi. *Enfance*, 1, 29-43.

(本学助教授 函館分校)